
変身する猫ヒーローだけど異世界来た

ガイアが俺輝けと囁いてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変身する猫ヒーローだけど異世界来た

【Nコード】

N8149Y

【作者名】

ガイアが俺輝けと囁いてる

【あらすじ】

2010年。動物愛護団体P。●Aから資金提供を受けた猫野目博士は研究の結果、ついに動物に人並みの知性を持たせることに成功した！知性を得て、当初は人に従っていた彼らだが、突如、虎毛の知性ネコであるブラックタイガーが人間社会の転覆を掲げて蜂起する。人類に対して融和的である犬族・鳥族は彼らの前に駆逐され、人類の運命はネコ族の良心であるライオンのマクシミリアン先生に託された！そして、人類に隠れた数々の激戦の結果、命を落としたマクシミリアン先生の意味を継いだ白いアメシヨ『小床木バン』は

捕えられた猫野目博士を救うべく、ブラックタイガーの秘密基地に突入。激闘の末にいにブラックタイガーを打倒した！そして、追い詰めたブラックタイガーは猫野目博士を使い、最後の悪だくみを実行に移そうとする……そして一同が会した時、サボってネトゲをやっていたブラックタイガーの研究員のせいで全員が異次元に飛んだのだ！！！！

俺の名は小床木バン！！！！

「おのれ…小床木バン（おとこぎばん）まさかこれ程の力を秘めていようとは…」

「ここまでだ！ブラックタイガー！猫野目博士を解放し、降伏して罪を償え！」

断続的に灯る赤いランプと警報を鳴らしながら、崩壊し続けるブラックタイガーの秘密基地の中。俺は纏わりつく黒服の戦闘キャットを前足のパンチで蹴散らしつつ、奥に倒れる黒い虎毛に歩みを進める。

「認めん…認めんぞ…たかがイエネコの化身である貴様が虎の力を持つ俺を倒すなど…」

「貴様を倒したのは俺だけの力ではない…」

「何だとおお…」

「俺の中には、貴様に利用され、使い捨てにされた6将軍の力と魂、そして親友であった片目の吉宗。さらには、貴様と俺の師でもあったマクシミリアン先生の魂が宿っているのだ！」

「くっ…裏切り者に死にぞこないの老いばれの力だと」

「そのバカにした老いばれの力を受けるがいい！変身ツマクシミリアン！！」

——パンテエラ・チェンジ！mode…レオ！！！！——

俺の首輪から流れる清らかな女性の声と共に、俺の体を一瞬で緑色の光が包み込み、辺りを眩しく照らす。そして光が引いた後、そこに居たのはがっしりとした体格に豊かなタテガミを持つ雄雄しきライオンの姿だった！

「くそう、他猫の手を借りる、猫かぶり野郎め！」

「なんとも言う方がいい、喰らえ、キングスブロー！」

唸りを上げて黒虎を張り飛ばす俺の右前足。

右頬に先生から授かったレオ・パンチを食らった黒虎は、哀れ勢いよく吹っ飛ぶと、『ズガン』と壁を碎き、隣の部屋にまで飛んで行った。

「これは・・・猫野目博士！！」

黒虎が突っ込むことで開いた穴の先には、頭にコードが付いたヘルメットを被らされた猫野目博士がベットに横になっており、そのコードをつないだパソコンの前で研究猫が一心不乱にマウスを操りながらキーボードを叩いていた。

「まだか…まだ解析できんのか…」

「ちよつと待つニャン！今、エリアボスと戦つてるところニャン！」

催促する黒虎に叫び返す白衣の研究猫。

エリアボスだと…こいつらは猫野目博士の脳からいったい何を…

そう俺が思ったその時。

「やったニャン！レアモンスター討伐成功ニャン！」

その言葉と共に、壁一面に張られていたディスプレイがもやもやと霞がかった様に不鮮明になり、強烈な光と共に、俺や黒虎、猫野目博士を含む数十ネコと一人は薄汚れた石造りの部屋にいた。

なんだか…ずいぶん長い時間寝ていたような気分だった。

その間に、何匹ものネコが俺のそばから離れて行った気がした。いつの間にか俺の変身は解かれており、なぜか黒虎も体の傷が癒えているようだ。

「貴様！今まで一体、何をやっておったのだ！！」

俺のそばでは黒虎が白衣の研究ネコの襟首を掴み、吊り上げながら怒声を上げている。

「ゲームにゃん！ずっとやりたかったニャン！今まで休みなしで働かされたんだから、文句言っなニャン！」

白衣の研究ネコはそう言うと、後ろ足で黒虎の腹を蹴りあげる。そして予想外の反撃に手を緩めた黒虎の隙を付いて、石の床を走り抜けて部屋を出て行った。

「万策尽きたな…ブラックタイガー…覚悟しろ。変身ツマクシミリアン！！」

俺は両前足を交差させると、黒虎に正義の鉄槌を下すべく再びライオンの姿に…

…あれ？変化しないぞ？

「変身ツマクシミリアン！！」

「…………マクシミリアン！！」

「マクシミリアンに変身っ！」

「じゃあ吉宗でもいい！」

「オイッ！反応しろ！！！」

首輪をぺしぺし叩きながら変身を促す俺。

しかし、首輪は何の反応も返さずに鈍く銀色の光を放つのみである。

「ほう…どうやら被ったネコが剥げたようだな！！」

俺の変身が上手いかわからないのを見て、威勢を取り戻す黒虎。

「くっ…舐めるなよ！他猫の手を借りずともこの『小床木バン』

！悪を成敗して正義を知らしめてくれるわ！」

変身を諦め、後ろ足だけで立ち、師匠直伝の拳法の構えを取る俺。

「ふっ…黒でも白でもネズミを捕るのが良い猫だという名ゼリフをその身に教えてやろう！」

そう言って、黒虎の体は巨大な虎の姿に変化する。
そして互いに突っ込む2匹。

「うおおおおおおおおおおお！」

黒い獣と白い獣、二つの体は交差し、数十秒の後に辺りは静寂に
包まれた…

俺の名は小床木バン！！！！（後書き）

さつきNHKの嵐の番組ででた、被災地のご当地ヒーローショー見てたら

変なインスパイア来た。

その結果がこれ。

これがプロローグだア！！！！

「あつルネ、猫が目を覚ましたわ。」

俺が長い眠りから気が付いた時、目の前にいた小柄な白髪のツインテールをした女は、そいいながら俺の前から離れていった。

「ここは一体……」

そう呟きながら起き上がる俺。痛み顔に顔を顰めて自分の体を見渡すと、自慢の白地を基調としたアメシヨ特有の艶やかな毛皮は包帯で包まれており、至る所に赤い血が滲んでいた。

「そうか……俺は負けたのか……」

思い出すのは、石で囲まれた部屋で対峙した、兄弟子である黒い虎毛。

奴は俺が繰り出した獅子山拳とまったく同じ技を虎の姿で使い、俺を打ちのめしたのだ。

おそらく、あの後瀕死になった俺を放置し、猫野目博士を連れて、黒虎は去ったのだろう。

そう思うと力が抜け、その場に倒れ込む様に横になる俺。

しばらくすると、白髪ツインテールと入れ替わる様に腰までうねる黒髪の大女がやってきて、俺の体を触ったり、あごの下に手をや

ったりなどして、怪我の調子を見はじめた。

とりあえず、タダの一般猫だと思わせるため、弱弱しく『にゃあん』とだけ一声鳴いておく。

黒髪の大女はそんな俺の様子を見て、

「転送システムはまだ起動してなかったって言うのに、アンタたちはどうやってやって来たんだろっねエ」

と呟いていた。

転送システム？

どういうことだと訝しがっていると、俺の首輪に内蔵されている人工AIが神経組織を通じて俺の脳の電気パルスを活性化させ、通信を開始し始めた。

—おはようございます、マスター—

—おはよう、マリーヌ—

声に出さず、思念で返事をする俺。

—さっきはなんで変身させてくれなかったんだよ—

もう少しで、黒虎を倒すことができたのに…と不満をあらわにすると、マリーヌは興奮した様子で返事を積みかけてきた。

—そんな事よりもですね！すごいんですよマスター！—昨日の…

ってマスターが寝てたから一昨日なんですけども。あの部屋中のディスプレイから光を浴びた瞬間にですね！次元の違う位置から干渉を受けて、私達の魂が転送させられたんです！実際にマスターの体も再構築されたものですし！私だって随分と機能が弄られて再構築されて！

—ちよつと、まってくれ。落ち着いてくれ。よくわからないよ—

AIの癖に興奮するマリーヌを宥める俺。

そもそもマリーヌはこれほど感情表現ができるはずはなかったのだが、なぜか今までにないほど表現豊かで、頭が痛くなってくる。

—もう！とにかくこれを見てください！—

マリーヌがそう言った瞬間、俺のしている光景の手前に緑色の情報ボードが映り、様々な情報を羅列した。

名前 小床木バン（おとこぎばん）

【基本職】F・CイエネコATUS【サブ職業】変身ヒーロー

腕力	イエネコ
体力	イエネコ
器用さ	イエネコ
敏捷	イエネコ
知力	人並み
精神	師範代
愛情	ネコ程度
魅力	薄めの虎柄・白アメシヨ

生命 馬ぐらい
運 ヒーロー

スキル

【獅子山拳・師範】Lv・17

【魂の伝承者】Lv・1

【正義の心】Lv・10

【人語】Lv・11

―…これがどうしたんだ？―

―すごいでしょう？私、こんな状態まで表示できる機能が付いたんですよ！―

―そうか…すごいな。―

何がすごいのかよくわからないが、とりあえずマリーヌを褒めておく。

そのまま興奮してしゃべり続けるマリーヌの機嫌を取りつつ、わかったことは。

俺とブラックタイガー一味はあの閃光で異世界に来たらしい。

そして俺が変身できなかったのは、異世界に来た時に6将軍と親友・師匠の魂が弾き飛ばされてバラバラになったから。

彼らを再び、見つけ出せば何とかなるんじゃないですか。

それよりも、猫野目博士に私を見てもらいたいから、とっととブラックタイガーたちを倒しちゃいましょう。

マリーヌの言った事を要約すると以上である。

俺もブラックタイガーを倒すことに関しては、異論がない。

しかし、俺の力である変身能力が失われた状態では勝てないだろう。

しかし、いつか滅ぼしてやるぞ、ブラックタイガー。

俺は傷だらけの体を柔らかいクッションに沈めると、英気を養うべく、段ボールの中で静かな眠りについた。

これがプロローグだア！！！！（後書き）

多分、引き伸ばしても全10話ぐらいで終わると思う

対決！跳猫拳！！！（前書き）

自分で書いた奴読み直してどうかで似たような設定見たなっ
た。

何かって言うと

↓後書き

対決！跳猫拳！！！！

女たちに手当を受けた俺は三日ほど経つと、傷もだいぶ癒え歩けるようになったので、隙を見て館を飛び出し、中世ヨーロッパのよ
うな街並みをトコトコと歩いていた。

「あれから四日…ブラックタイガーめどこに消えたのだ？」

そうやって黒虎一味を求め、街中を探す俺の姿はさすがに目立つ
のか。

俺を見て『ネコちゃんだー』と叫びながら子供たちが寄ってくる
と、頭を撫でては気持ちよさそうに笑って行ったりする。

どうやら異世界でも俺の姿を見て人は笑ってくれるらしい。

人を癒すために存在すると言っても過言ではないイエネコ冥利に
尽きるひと時だ。

俺もつい嬉しくてゴロゴロと無意識的に喉を鳴らしてやると、エ
サの催促とでも思ったのか、少女が家から干し肉を持って来て、そ
の場で裂いて俺に食べさせてくれた。

地球のキャットフードとは違う無味乾燥な味わいだ、指先に水
仕事のあかぎれをもつ少女の姿を見る限り、それでも大切な食糧で
はないのだろうか。そう思うと、ありがたさが骨身にしみる。

俺の食べる姿を嬉しそうに見つめて『ネコちゃんまたね』といっ

て途中だった水汲みに去って行った少女。

その姿をほほえましく眺めていた俺だが、ふと気づくと、少女が出てきた家に黒い服を着た見慣れた影が多数侵入していくのが見えた。

まさかと思い、少女の家の窓（木の戸板をつつかえ棒で開け閉めするタイプ）によじ登る俺。果たして中では、ブラックタイガーの戦闘猫が台所の食材を持ってきた袋に詰め込むところだった！！

あのような少女があかぎれを作るほど働かなければいけないほどの赤貧の家庭だというのに、その家から盗みをするとは許せん！！！！

「変身！獅子拳ジャー！！」

ーフェリス・チェンジ！mode…カトウース！！ー

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、窓の上には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

♪♪♪♪♪

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘AI『マリーヌ』と共に
人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！
バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて
バンを覆面ヒーローにするとこだ！！！

♪♪♪♪♪

「とうっ！！！」

窓から家の中に飛び降りた俺は、行きがけの駄賃に近くの黒服戦闘猫にとび蹴りをかましながら地上に降り立った。

「ニャー！ニャー！ニャー！」

俺の姿を発見し、警戒音を発する黒服戦闘猫たち。

数は8匹と言ったところか。

「貴様らの悪事しかと見た！人の好意を猫跨ぎにするその行為、
断じて許さんぞ！」

叫びながら、近くに居た戦闘猫をネコパンチで入口まで吹っ飛ばす俺。そのまま家の外に戦闘猫を引き連れて野外戦に持ち込む。

「とうっ！たあっ！」

「ニャー！ニャー！」

そのまま俺を取り囲む戦闘猫達だったが、マクシミリアン先生直

伝の獅子山拳を極めた俺の敵ではなかった。打撃を腹に貰って蹲る者、顔面に食らって吹っ飛ぶ者。そして腹を見せて降伏を示す者など、2分もしない内に残りは2匹にまで減っていた。

「残りは貴様らのみだ！！覚悟しろ！」

『はああっ』と【獅子山拳渦巻の構え】を取る俺。

その俺の姿に氣勢を削がれる戦闘猫達。

これは戦わずしてもよいかもしれんと俺が思った時、

立っている俺に太陽の光が急に当たらなくなった。

ーバン！上です！ー！ー

俺はマリーヌの声よりも早く反応していた。

バグオン！！

横っ飛びにとんだ俺が先ほどまで居た場所に突き刺さるしなやかな脚。

そして黒い耳に筋肉質の体。

「お前はエスマイル！！」

「いかにも！我は6将軍が一、『跳梁將軍エスマイル』である！
！」

エスマイルは特徴的な黒く尖った耳を風になびかせながら、俺を睨みつける。

「久しいな、『小床木バン』！！今回は『マクシミリアン』にしてやられたが、今回はそうはいかんぞ！」

「さて！お前は確かに死んだはず！なぜ生きているのだ！？」

「知れたこと！武人として貴様との決着を付けるために地獄から舞い戻って来たのよ！『変身ツ！C・カラカル！！』」

エスマイルの叫びと共に、茶色の光がエスマイルを包むと、エスマイルは両後ろ足にとがった黄金のかぎ爪が付き、背にはマントのような薄絹を纏った姿に変身した。

「再びわが跳猫拳で、お前を借りてきた猫のように動けなくしてやるわ！」

『バツ』つという音と共に空高く飛び上がるエスマイル。

そのまま太陽の光の中に姿が隠れ、俺からはその位置が掴めなくなる。

―来ます！逃げてくださいバン！―

マリーヌの指示を受け、とっさに、横に避ける俺。

しかし、避けそびれたのか、エスマイルの着地の瞬間、『ガリッ』と左わき腹あたりの衝撃アーマーがエスマイルのカギ爪で削り取られる。

それにかまわず、とっさに反転し、エスマイルを捕まえようとしたが、近寄る前にエスマイルは再び空高く飛び上がってしまった。

くそつ。

奴の跳猫拳の恐ろしさは、極端に軽量化された装備で一撃離脱を繰り返すそのスタイルにある。通常、変身能力を持つ俺達は、その力と不釣り合いなほどの体の脆弱さをカバーする為に衝撃アーマーを全身に着ようとするのが一般的だ。

しかし、エスマイルはその流れに逆らい、あえて装備を足の力ギ爪という攻撃ポイントと空中で着地地点を変更するための背中のエアマントだけに絞っているというレアスタイルなのだ。

かつて、俺がエスマイルと戦った時、俺は奴の跳猫拳に手も足も出ず、近くの犬小屋の中に逃げ込み身動き一つ出来なかった。そこにやってきたマクシミリアン先生が俺に手本を示すように【獅子山拳・山降ろしの構え】で奴の左前足を負傷させ、弱った奴を吉宗と共に倒したのである。

そして先生は『跳猫拳の恐ろしさは太陽が天高くある時である』と言っていた。もし奴と夕方でなく、昼に戦っていたら、先生でさえ太陽に隠れるやつを止められるかは運しだいになるとも言っていた…

もう、マクシミリアン先生はいない…

そして、あの時、俺と共に戦っていた吉宗もブラックタイガーに殺されてしまった。

「ははは、どうした『小床木バン』！マクシミリアンがおらぬと惨めなものだなあ！」

そう言いながら、跳ねては俺のアーマーを削り取り続けるエスマイル。

「また2匹でまとまって犬小屋に逃げ込んだらどうだ？…ああ、そう言えばあの片目はもう死んだのかあ！！」

俺を罵倒しながら、嬉しそうに声を弾ませるエスマイル。

『あの片目も弱かったなあ』

『ブラックタイガー様からお前を守って死ぬとは無駄死にだったなあ』

などと、吉宗まで罵倒し始めた。

「無駄死にだと…ふざけるな！」

怒りに震える俺の動きが鈍る。

次の瞬間。

ズガッ…

「…相変わらず、単純な漢よ…」

エスマイルは動きが止まった俺の背中にカギ爪を直撃させ、倒れ伏す俺を地面に押し付けるように踏みつけていた。

「このような弱小ではブラックタイガー様に傷一つつけられんわ…」

呟くと同時に俺から離れ、地面に降り立ち、再び空高く飛び上がるエスマイル。

「次の一撃で友に会わせてやろう…」

奴は天空から天啓を授けるかのように俺に語りかける。

「吉宗には会っさ…だが黒虎を道連れにしてからだ！」

俺はボロボロでもう役に立たない衝撃アーマーを解除すると、生身で立ち上がる。

そして両前足を空高く上げると両後ろ足を前後に開き、【獅子山拳・山降ろしの構え】を取る。

もし、これが失敗すれば、俺は奴のカギ爪に引き裂かれ、死ぬだろう。

だが、奴の姿は太陽に隠れて良く見えない。

マリーヌのセンサーに頼ったとしても、反応が遅れてやられてしまっだろう。

そう思いながらも、ボロボロの体で構えを取る俺。

タイミングを読ませないためか、いつもより滞空時間が長いエスマイル。

ふと、太陽の中から鈍い光が反射しているの気づいた。

その光が見えた瞬間、俺は両前足を強く握りしめた。

そして前足に係る確かな感触。

そのままつかんだモノごと地面に叩きつけるように両前足を振りぬくと、

茶色い黒耳のネコは頭から勢いよく地面に衝突し、植木鉢が割れるような音をたてて地面に張り付いた。

「『上手の猫が爪を隠す』と言うが…貴様は謙虚になれなかったようだな!」

奴の輝くように派手な黄金のカギ爪。

それが反射する光が太陽の中に隠れた奴の落下を俺に知らせたのだ!

「見事だ…小床木バン…」

瀕死になったエスマイルは満足したような表情で俺を見ていた。

「私の跳猫拳を破るとは…貴様こそ真の武人…わが跳猫拳を託すにふさわしい…」

「エスマイル…お前まさか俺に…」

「言うな…我はブラックタイガー6將軍…仲間を逃がすためなら

死など厭わんよ…」

そう言われて周りを見渡してみると、倒れていた黒服戦闘猫達はとつくに逃げ去っていた。

「よいかバン…真の良将とは戦争に勝てる将ではない…兵の犠牲を最も少なくでき、目的を達成することができる者…それが良将なのだ…」

「エスマイル…」

彼の言葉に偽りはなかった。

それは、たとえ捨て駒にされるのが分かっていたとしても、たった一匹で部下を逃がすために先生と俺、吉宗の三匹を相手に戦ったあの時の奴の行動が、最も雄弁に語っていた。

エスマイルは弱弱しく前足を俺の方に差し出す。

迷いなくその前足を握る俺。

その瞬間、エスマイルは息を引き取り、奴の魂は再び俺の中に戻ってきたのであった。

対決！跳猫拳！！！（後書き）

ティウンティウンティウン…

名前 小床木バン（おとこぎばん）

【基本職】F・CATUS^{イエネコ}【サブ職業】変身ヒーロー

腕力 イエネコ

体力 イエネコ

器用さ イエネコ

敏捷 イエネコ

知力 人並み

精神 師範代

愛情 ネコ程度

魅力 薄めの虎柄・白アメシヨ

生命 馬ぐらい

運 ヒーロー

スキル

【獅子山拳・師範】Lv・17

【魂の伝承者】Lv・2 →

（C・caracal）

【正義の心】Lv・10

【人語】Lv・11

とめる！牙豹拳！！

エスマイルを倒した俺は、傷だらけでフラフラと歩いている所を再び白髪ツインテールに見つかり、館に連れ戻された。

そして傷を癒すこと2日。

ほぼ完治した俺は、空いていた窓から外に飛び出すと、再び黒虎一味を成敗すべく、町を歩き回っていた。

俺は大通りを避け、今日は、城壁をぐるりと回る事にした。なぜなら、3日前にエスマイルと大立ち回りしたせいで、何人かの人間に俺の姿を見られてしまった可能性があるためだ。

そんな俺が城壁の下を歩いていると、少年が可愛いヒヨコを抱きかかえて、ゲージに入れている姿が見えてきた。

少年の手を抜けて走り回るひよこ。

「こら、逃げ回るなよ」

怒る様にヒヨコを捕まえてはゲージに入れている少年。

どうやら、ここの御宅は養鶏を行っているらしい。

少年の仕事は、鶏になる前のヒヨコの面倒を見る事なのだろう。

そう思いながら、ほのぼのとした目で少年を見ると、

少年は俺がヒヨコを狙っているとも思ったのか、『しっしっ』と腕を振るそぶりをして、俺を追ひ払おうとした。

すまん、申し訳ない
そう思い、その場を後にする俺。

少年は俺が去って行くのを確認すると、すべてのヒヨコをゲージにいれ、家の中へと入っていく。しかし、俺を追い払う際に目を離したせいか、一匹だけ物陰に隠れたヒヨコがゲージの外に取り残されており、少年の仕事ははまだ未終了と言ったところか。

まあ、ゲージを家中に仕舞う時や、エサやりの時に気付くのだろう。

頑張れ、少年。
社会に負けるなよ！

心の中でエールを送り、クールに去ろうとした俺の横をぶわっと一陣の風が過ぎて行った。

あれは…
と思つたのもつかの間、風は物陰に隠れるようにしていたヒヨコの元へたどり着く。
哀れな黄色い毛むくじゃらは『ぴぎっ』という声を上げて、その命を終えた。

あつという間の間に行われた虐殺に驚く俺の目には、ヒヨコを口に咥え、その斑点だらけのしなやかな体をこちらに見せつける優美な雌の姿。

「ずいぶんとしよば暮れているわね」
「君は…テレーズ…！」

その姿に懐かしさにも似た思いを抱き、怒るのも忘れる俺。

テレーズはそんな俺を一瞥すると、ヒヨコを口に咥えたまま、踵を返して去って行こうとした。

「待て、テレーズ！」

最速のネコ科に追いつかる俺。

テレーズは俺をチラと振り返ると

「いいのかしら…後ろの子たち…どうやら猫の手も借りたい事態のようよ」

と呟くと、一陣の風のように姿を消す。

あわてて後ろを見ると、雲状の斑点におおわれた大きなネコ科に率いられた戦闘猫が大挙してヒヨコの檻に押し寄せていた。

「野郎ども！やるぜ！！」

叫びながら首を一閃させる先頭のネコ科。

振られた牙は、一撃で檻を切り裂き、崩れた場所からは慌てたヒヨコが逃げ出し始める。

それを逃がすまいとそれぞれが思い思いに捕まえて袋に入れていく戦闘猫達。

おのれ…未だ生まれて間もなく、自衛の手段もない人の家畜に手を出すとは許せん！！！！

「変身ッ！獅子拳ジャー！！！！」

ーフェリス・チェンジ！mode…カトウース！！ー

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、路上には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

♪♪♪♪♪

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘AI『マリーヌ』と共に

人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！
バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて
バンを覆面ヒーローにするとこができるのだ！！

♪♪♪♪♪

突如として現れた光に立ちすくむ戦闘猫達。

その隙に俺は捕えられていたヒヨコたちの袋を爪で切り裂くと、
ヒヨコたちは雲の子を散らすようにその場から逃げて行った。

「貴様…『小床木バン』！！！」

「そう言うお前は『剣王將軍トウルシギリ』！！！」

俺の姿を見つけ、憎しみのこもった目で俺を見つめるトウルシギリ。

「今日は何と言う良い日だ…あのにつくき獅子山拳の継承者である貴様を抹殺できる日が来ようとはな！！！」

トウルシギリは叫ぶと共に、部下である戦闘猫を一斉に俺に飛び掛からせる。

「ふん、道場破りに着た拳句、先生に敗れて師を失った逆恨みとは、底が知れるぞトウルシギリ!!」

飛び掛かってきた黒服戦闘猫を冷静にさばきながら回転するように自爆させ続ける俺。

戦闘猫どもはニャーニャー叫びながらその数を1匹また1匹と減らしていき、ついにはトウルシギリとあと3匹を残すだけとなった。

「やはり、タダの戦闘猫など相手にならぬか！チェンジ！N・ネブローサ!!!」

声と共にトウルシギリを灰色の光が包み、現れたのは魚鱗甲に身を包み、口からサーベルタイガーのような牙を生やした姿だった。

「わが牙豹拳で貴様を猫に逢った鼠のように怯えさせてくれるわ!!!」

「なにを！ネコが茶を吹く事を言いおって!!」

交差する俺とトウルシギリ。

俺の打撃は奴に当たったものの、その堅い魚鱗甲に阻まれてダメージを与えられなかった。

「そんなものか？ではこちらから行くぞ!!喰らえ、雲豹流二太刀の剣!」

トウルシギリはその首を横に傾け、顎を好きだすようにして、俺に切り付けてくる。その斬撃を躲し、奴の脇腹に『獅子山拳流レオ・

パンチ』を放ったが奴の魚鱗甲にまたしても防がれる。

―バン、危険です離れてください―

頭の中で、マリーヌの警告が鳴り響く。

「甘いわ!」

突き出した顎を引き、二本のとがった牙を俺に突き立てるトゥルシギリ。俺は危うく避けたものの、奴の牙でかなりアーマーを損傷してしまった。

奴の攻撃力の凄まじさに、慌てて距離を取ろうとする俺。

しかし、トゥルシギリは俺を逃がすまいと首をぶんぶん振り回し、逃げる俺のアーマーを着実に削っていく。

―バン、一度逃げましょう!―

マリーヌの叫びが聞こえるが、奴の剣陣は広く、逃げ切る事は出来そうもない。

「ふはははは!最強の牙に耐打撃最強の鎧!イエネコ程度の攻撃など通じんよ!」

奴の言うとおり、俺の攻撃は一切奴に通じていない。

このままでは…死ぬ!!

『ふむ…バンよ、ではわが跳猫拳を使わせてやろう』

辺りに響き渡る凜とした声。

その声と共に、俺の体は茶色の光に包まれ、マリーヌが弾んだ声

でナレーションする。

ーカラカル・チェンジ！mode…カラカル！！！！

そして光が引くと、俺はカギ爪とマントを持ったエスマイルのアーマーを装備した、美しい茶色のネコ科に変身していた。

「その姿はエスマイル！そうか、貴様がエスマイルを倒し、その力を奪ったのだな！」

「違う！エスマイルは俺を武人と認め、その力を俺に託したのだ！」

叫ぶと共に、空高く飛び上がる俺。

そして空中で態勢を立て直し、マントを使って勢いよく地面に降り立つ際に、奴の魚鱗甲をカギ爪で切り裂く。

「おのれ！」

振り回す大牙が俺のマントをかすめて生地が少し散ったが、気にすることなく再び空に舞い上がる。

そして再び『反転したT字状』に交差する俺とトゥルシギリ。

何度もその激突を繰り返すうちに、奴の魚鱗甲はすっかり剥げ、俺のマントもズタズタに切り裂かれた。

「…お互い次の一撃で決まるな…」

牙以外のアーマーを解除し、トゥルシギリは居合抜きのように顎を引いて牙を構える。

俺も、ぼろぼろになったエスマイルの姿を解き、再びイエネコの姿に戻った。

両者の間に緊張が走る。

そして、奴に向かつて駆けだす俺。

飛び込んでくる俺に居合抜きを合わせるべく、首を振るトウルシギリ。

しかし、奴がとらえたはずの俺は、直前で地面にへばりつくように停止しており、奴の巨大な牙の居合切りは空を切った。

「【獅子山拳流・牡丹雪の構え】：そしてこれが俺を鼠とのたまった貴様へのはなむけだ！」

そして俺は首を振ったことでから空きになったトウルシギリの首筋に突っ込むと、その喉笛をイエネコの牙で噛み切った。

「窮鼠猫噛むとはこの事だな！！」

「ぐふっ」

喉を抑えて倒れるトウルシギリ。

「命までは取らん。貴様がブラックタイガーのアジトを教えるならな……」

負け猫に情けを掛ける俺。

「見事なり…小床木バン…2代に渡って牙豹拳が破れようとはな

…」

「牙豹拳は強かったぞ、トウルシギリ。しかしそれはあくまでも自分を守り、他人を傷つけるだけの強さだった…」

俺の言葉に目を見開くトウルシギリ。

「獅子山拳の極意…それは他者を慈しみ、弱者を守る心の強さだ！」

そう、それはエスマイルと俺に共通する、弱者を守るという心に通じる事であり、エスマイルが俺に力を貸す理由ともなった強さである。

「そうか…わが師も我も体ばかり鍛え、心を鍛えてはいなかったのだな」

そう言つて、喉を抑えたまま立ち上がり、俺の目を見て何かを決心した。

「敗者は勝者に従うもの…我はこれより獅子山拳伝承者である貴様に従おう！」

トウルシギリがそう言った瞬間、奴の腹には大穴があいた。

そしてその傷を呆然と見ると、奴はフラフラとたたらを踏み、その場に崩れ落ちるように倒れ込んだのだ。

恐怖！黒猫真拳！！

ジャーン…ジャンジャンジャーン（銅鑼の音）

『いつの世からの理か、古来より社会の陰で弱者を貪りつづける悪の組織…』

『人の知らぬ闇の中…そんな悪の組織に立ち向かう一匹の猫がいた！』

『変身ヒーロー獅子拳ジャー！！』

チャララ、チャーララ、チャラララチャンガッシーン！！

あのビル影の奥、届かぬ正義に泣く声に

答える力が巡りくる

倒れたお前に与えるモノは

白き虎毛の小さき体

振るえ右足、力の限り

すり寄る友が倒れても

ならせ喉音、息する限り

抱く腕が温まるまで

闇の中の、光るネコ目を見逃すな

輝けバン！流星の如く！

〳前回のあらすじ エスマイルを倒した俺の前に現れ、ヒヨコ

を惨殺していったテレーズ！彼女が去った後やってきたトゥルシギリをバンはついに倒した！そして改心したトゥルシギリが立ち上がった所、彼の腹に大穴が開いた。そしてトゥルシギリはその場に崩れ落ちるように倒れ伏したのだ！」

「トゥルシギリ！大丈夫か！」

俺が倒れたトゥルシギリに近寄ると、奴は息も切れ切れで明らかに目の焦点はあっていなかった。傷口はちょうど腹の中央にぽっかりと空いており、そこからは『だくだく』と血が流れ続けている。

「…俺に氣を取られるなバン…奴はすでにお前を狙っているぞ…」

瀕死ながらも俺を氣にするトゥルシギリ。

「奴とは？」

「裁きのムカージー…」

「ムカージーだと！」

俺がそう叫んだ時、俺と1Mほど離れた路上の空間が突如としてぐにやりと歪む。

そしてそこには雄雄しき黒豹が此方を冷酷な目で見据えていた。

「裏切り者が…一撃でとどめを刺しておくんじゃない…」

「お前はムカージー！！お前…一度は改心し先生に従っていたというのに再び黒虎に従うとはどう言う事だ！」

「ふっ…前にわしがマクシミリアンに下ったのは年経た事による氣の迷いよ…復活して若返った時、気づいたのじゃ…6將軍として

の誇りにな！！！」

ムカージーがそう言いながら右前足を上げると、何処に隠れていたのか、黒服の戦闘猫がずらりと奴の後ろに整列した。

「出会え、出会え！！トウルシギリもろともやってしまえ」

その掛け声を聞き、トウルシギリの部下がわれ先へと逃げ出していく。

「ううむ…再び悪の道に戻ったのみならず、仲間を殺そうとするとは許せん！！」

「変身！獅子拳ジャー！！」

―フェリス・チェンジ！mode…カトウース！！―

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、路上には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

♪♪♪♪♪

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘AI『マリーヌ』と共に

人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！
バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて
バンを覆面ヒーローにするとこができるのだ！！！！

♪♪♪♪♪

「犬猫も三日飼えば恩を忘れずと言う！先生への恩を忘れた貴様に正義の鉄槌を下してやろう！！」

「恩など猫に小判じゃ！変身…パンテエラ・パルドウス…」

ムカージがそう呟くと共に、ムカージはその場からふっと姿を掻き消してしまった。

「逃げたか…ムカージ！」

突っ込んできた戦闘猫を叩きのめしながら俺はトウルシギリを守り続ける。

そんな俺を見て、トウルシギリは苦しそうに苦言を呈した。

「…バン…お前は知らんかもしれんが…ムカージのアーマーは光学迷彩…奴は姿を消しているのだ…」

「なんだと…そのような力を隠していたのか！」

以前、俺に魂を預けた時には、助言しかくれなかったムカージ。知将と言われただけはあって、奥の手を隠し続けていたようだ。

「…ふっわしの黒猫真拳は門外不出の暗殺拳…継承者以外には決して使わせんよ」

「戦闘員に隠れて奇襲とは門外不出も大したことないな！」

突っ込んできた戦闘猫2匹の頭を小突き合わせるかのようにぶつけ、一度に倒した俺が叫び返す。その時、俺の右わき腹に前触れなく鋭い打撃が直撃するのを感じた。

「くっ・・・」

吹き飛びながらも態勢を整える俺が慌てて元居た場所に戻り、めくらめつぽうに連打を放つが、まったく捕えられない。

「面白い踊りよのう、小床木バン…正義のヒーローなど止めてサ
ーカスにでも入ってはどうか？」

「ぐわっ！」

奴の話声のした方向に打撃を打ち込み続けたがかすりもせず、逆に背中を打たれ、アーマーの大部分を削がれてしまった。

「このままでは負ける…」

そう思った俺の目に、戦闘猫に囲まれたトウルシギリの姿が目
映る。

「やめよ、貴様ら！」

慌ててトウルシギリに纏わりついてた戦闘猫を跳ね飛ばし、安全を確保してやる。

「小床木バン…俺の事は放っておけ…」

「何を言っている…その傷では戦闘猫一匹さえ相手できぬである
う！」

「…バン…俺はもう死ぬ…その前にお前に…」

「やめろ！トウルシギリ！必ず助かる！！」

囲んでいた戦闘猫にネコパンチを繰り出していた俺だが、またも

やムカージが奇襲をかけたため、トウルシギリの足元に吹き飛んでしまった。

「ぐっ…」

打ち所が悪かったのか、立ち上がれない…

「もはや…態勢は決したな…」

そうムカージが近くで囁くのが聞こえる…

どうやら、これで終わりらしい。

そう思った俺のアーマーが解除され、俺はただのイエネコの姿に戻ってしまった。

「バン…死ぬな…お前はここで死んでいい漢ではない！」

そう、俺の耳元で声がした。

ふと見ると、血だらけのトウルシギリが俺を守るかのように仁王立ちしていた。

「やめろ…トウルシギリ…」

「ふっ…わが牙豹拳は獅子山拳とは違うのだ…」

「獅子山拳は弱者を守る拳だが…牙豹拳は傷つける技…それが…たとえ…自分であっても！」

トウルシギリは唯一纏っていたアーマーである牙を自らの体に突き刺す。

そして、首を振り、傷口を広げると、辺りにトウルシギリの血が飛び散った。

「なんじゃとおおおおおお」

途端に上がる叫び声。

見るとトウルシギリの血を浴びたムカージィがその透明な体に血を付けて、真つ赤な豹の姿を衆目にさらしていた。

「後は…頼んだぞ…バン！」

崩れ落ちるトウルシギリ。

「わかった…お前の覚悟…決して無駄にはせん！」

息を引き取ったトウルシギリの魂が俺の体に宿るのを感じ、涙と共に右手に力が宿るのを感じる。

そしてムカージィに全力で突っ込む俺。

白い体は流星の如く輝き、俺はその力のすべてを使い、獅子山拳師範・俺だけが使える必殺技を奴にぶつけた！

「シューティング・カトウース！！」

流星の如く突っ込む俺の右前足にトウルシギリの大牙が重なる。

そして俺の右前足はムカージィの光学迷彩を引き裂き、中に居た奴に大ダメージを与えた！

「ぬぐわあああああつああ」

ムカージィは派手に吹っ飛び、城壁にぶつかると、その動きを止めた。

そして、逃げ出す戦闘猫ども。

その姿を確認した俺だが、力を使い果たし、奴にとどめを刺すこともできず、その場に突っ伏している。

「…やったぞ、トウルシギリ…お前の仇を討って」

「…果たしてそうかな！」

声に驚き、顔を上げた俺の目に、立ち上がるムカージの姿が映った。

「最強と言われる獅子山拳といえども、使うのがイエネコではわしに致命傷を与える事は出来なかった様じゃのう…」

「……くっ」

悔しくて臍をかむ俺。

獅子山拳を学んでいる時より、俺がイエネコであることはことあるごとに、俺を悩ます問題だった。イエネコの力はネコ族の中でも1・2を争うほど弱く、力を必要とする獅子山拳の同門の先輩方には他の流派を学ぶように何度も忠告されたものだ。

それを克服すべく、アーマーに使う怒りパワーで自らの体を流星へと変え、敵に超打撃を与える俺だけの必殺技を編み出すことで、先生から師範と認めてもらうことができたのだが…奴を倒すための力には少し足りなかったらしい…

「まあ、今回は…みのがしてやろうかのう……」

そのまま死を覚悟した俺だったが、ムカージは意外なことを言っただけでその場を去って行こうとした。

「とどめを刺さんのか？」

「わしは知将ぞ？何度お前と戦っても負けんのに、なぜ怪我をし

たこの状態で無理せねばならんのだ？」

昔ながらの笑顔で俺を見るムカージー…
まさかムカージーは俺を鍛えるために…

ありがとう…ムカージー…そう奴の後ろ姿に礼を述べる俺。
そして、俺はそのまま気を失い、気づいた時は再び、白髪のツインテールの館の中だった。

「うぎゃあああああああああああああああ」

真っ暗な闇の中にムカージーの叫び声が響き渡った。

「まったく…ジジイはこれだから使えないわね」
しなやかな最速のネコ科はそう言う。ムカージーの体に手を置き、その魂を切り裂いた体から『つるり』と吸収する。

「うん、なるほど、こう使うのね。なかなかいいじゃない」
美しい顔に肉食獣の笑みを浮かべながら、テレーズはその場から『ふっ』と姿を消した。

恐怖！黒猫真拳！！（後書き）

名前 小床木バン（おとこぎばん）

【基本職】 F・CATUS^{イエネコ} 【サブ職業】 変身ヒーロー

腕力 イエネコ

体力 イエネコ

器用さ イエネコ

敏捷 イエネコ

知力 人並み

精神 師範代

愛情 ネコ程度

魅力 薄めの虎柄・白アメシヨ

生命 馬ぐらい

運 ヒーロー

スキル

【獅子山拳・師範】Lv・17

【魂の伝承者】Lv・3 →

(C・caracal)

(N・nebulousa)

【正義の心】Lv・10

【人語】Lv・11

百目猫拳と猫泳拳！！

「もう外出したら駄目よ」

白髪のツインテールは、その可愛らしい顔を怒ったように膨らせて、俺に話しかけた。さすがに、傷が癒える前に2回続けて逃げたのは警戒を持たれたらしく、俺を逃がさないためにマリーヌがインストールされている俺の首輪に鎖をつけて動けなくするほどの念の入れようだ。

自分に直接鎖を繋がれたマリーヌも

「6将軍との戦いで、バンの体は傷んでいます。ちょうどいい機会なのでしばらく傷を癒すことに集中しましょう」

と言って、俺に休息するように勧めたので久しぶりにただのネコとしてのライフをエンジョイすることにした。

と言っても…クッションを引いた段ボールの中で寝続けるだけだが…

「ルネー。そう言えばさー、この前この猫が送られて来た時のログ見てただけだよ」

俺の毛を撫でていたツインテールがうねる黒髪の大女に楽しそうに話しかける。

「あの時、猫達だけじゃなくて、一人だけ人間も混ざっていたんだよね」

「人間ねエ…何か面白いスキルでも持ってたのかい？」

「んールネには、な・い・しよ」

「めんどくさい事せずにさっさと言ったらどうだい？」

「どうしてもなら力づくで聞き出したら」

「…まアどうだっていいけどさア」

「キヤハハハ逃げるんだー」

どうやら、猫野目博士の事を話しているらしい。

それにしてもスキルとはなんなのだろうか？

疑問に思いながらツインテールを見ると、振り向いた俺の目の前。ほぼ20センチに満たないという予想外に近い位置に彼女の頭がある。どきりとする。

ツインテールはその真っ黒な目で俺を覗き込んできていた。

「ネコちゃんもひ・み・つ」

…なんだろう、この女は普通の人間とはずいぶん違った雰囲気だ。言う事や振舞いは若い女性そのものだけど、その皮の下には違う生き物でも潜んでいるかのような、気味の悪い圧力を俺にかけてきている。例えるなら、そう…猫を被っている…まさにそんな感じである。

そんなツインテールは何時までも、いつまでも俺を楽しそうに眺めていて、まるで俺は針のむしろのような気分。そんな毛皮の中に、虫が這いずりまわるような気持ち悪さを感じながら、俺は観察するようなツインテールの目から逃れるように、目をつぶり、眠りの世界に旅立ったのであった。

転機が来たのは1週間後。

あのツインテールは俺に常に鎖をかけると同時に、自分の手元から離さないようにしていたが、ある日急に俺の監視を緩め、トタトタ

と部屋の外に出て行った。そのチャンスを逃すことなく、俺は前足で鎖をそつと外すと窓のカギを開けて外に逃げ出す。

そのまま街中を走り抜けて南の大通りをかなり走った所でようやく一息をついた。

― 助けてもらっていて失礼なのはわかるが… 薄気味悪い女だったぜ―
― ですね… なるべくあそこには戻りたくないものです―
― けどあそこ以外に食事を得る伝手もないしな…―

そんな事をマリーナと話しながら歩いていると、大通りの左側に大きなため池があるのに気付いた。どうやら、城門の下から川の水を引いて池にしているらしく、周囲は柵におおわれているものの、水は腐っていない。

― ため池だぜ―

― ため池ですね―

― ここがあればあそこに戻らなくても済むんじゃないか？ 魚もいそうだし―

― … いやですよ。私精密機械なんで…―

― 防水性は完璧だろ―

― 絶対イヤ！―

なんだよ。折角いい場所だと思ったのに。
でも、魚が居るかどうかなだけは見ても良いよな。
どれどれ…

… 小さいカニがいるぐらい？

深い所になら居るかもしれんけど、大通りの反対側の面、葦が茂ってるあたりなら、岸边にも魚いるかもしれないな。歩き回ってみるか。

そうして池のふちに沿ってゆつくりと歩き、葦の中に足を踏み入れると…居るわいるわ。5センチほどの魚が水面に落ちた虫を食べようとわんさか集まってきていた。ちょうどおなかも減って来たし、鍛錬の意味も込めて漁をすることにする。

体を地面に伏せて待ち伏せし…たあっ

よし、小さいがまあよからう。

バリバリ食って力も出た。

じゃあ帰るか…と思い葦の中を歩いていると、葦原の中に葦を切り倒してくりぬいたような一角があり、そこでは多数のネコが酔っぱらったかのように寝転んでいた。

何事だろう？と思い近寄ってみると…どうやらマタタビをやっているらしい！美人の飼い猫も働き者の三毛猫もみんなトロンとした目で涎を垂らして寝転んでいる！

そしてその区画の端では

「…お願いニヤン…どうしても欲しいんにゃん」

と泣くように黒服猫に頼み込む子猫たちの姿があった。

黒服の怪しい猫は子猫たちに向かって、蔑みの目を向けると、『エサ持って来てないなら帰れ』とだけ言い放つ。

「生まれて2か月の僕らにエサなんて…お願いにゃん。お母さんが欲しがって動けなくなってるにゃん」

と黒服にすがりつく子猫たち。

「いいか坊主ども、マタタビはな、金持って来てないガキに売れるもんじゃねえ」

掛けたサングラスをクイクイといじりながら黒服猫はしがみついた黒ぶちの子猫を蹴り飛ばし、白い子猫を押さえつけるとその頭を前足で叩き続ける。

「つつか、お前らも一回マタタビやればよくね？味を覚えれば、きつとマタタビ欲しさにエサもすぐ持ってくるようになるからよ」
そう言つて黒服はポケからマタタビのビンを取り出すと、子猫の口元に近づけていく。

…子猫の母親をマタタビづけにした挙句、ネグレストされた子猫を更にマタタビづけにして支配しようとするなど…猫の鼻のように心の冷たい奴らよ…許せん！！

「変身ッ！獅子拳ジャー！！！」

―フェリス・チェンジ！mode…カトウス！！！！―

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、葦原の中には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

♪♪♪♪♪

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘AI『マリーヌ』と共に

人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！

バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて

バンを覆面ヒーローにするとこだ！！！！

♪♪♪♪♪

「とうっ」

変身した俺は、そのままの勢いで黒服猫にとび蹴りをかますと、子猫のそばに置かれたマタビのピンを蹴り飛ばし、池に放り込む。

「貴様らの悪事…この獅子拳ジャーがしかと見た！ネコ麻薬をばらまくその罪をお前の体に教え込んでやろう！」

「何！獅子拳ジャーだと！！出会え出会え！曲者だ！」

黒服猫が合図をすると、何処にいたのか葦原の至る所から、黒服の戦闘服猫がやってきてバンを取り囲む。

「ニヤーニヤーニヤー」

「むっ！相変わらずのブラックタイガーの一味か…よかろう成敗してくれる！」

『バン！我も6將軍としての責任がある！ここは我の力に任せよ！』
「そうか…では、変身ッ！エスマイル！」

その声と共に、俺の体は茶色の光に包まれ、マリーヌが弾んだ声でナレーションする。

ーカラカル・チェンジ！mode…カラカル！……ー

そして光が引くと、俺はカギ爪とマントを持ったエスマイルのアーマーを装備した、美しい茶色のネコ科に変身していた。

「跳猫拳の恐ろしさを知るがよい！」

俺はエスマイルの力をフルに使い、戦闘猫を次々と打ち倒していく。

そして1分もたたない内に、10匹以上いた戦闘猫は残り2匹まで減っていた。

「これで終わりだな！喰らえ跳猫拳！！」

そう言つて飛び立った俺の体に、上空で突き刺さるような衝撃がもたらされた。

慌てて態勢を整える俺。

フラフラながらも地面に着地すると、俺の背中の毛皮が裂けて血が噴き出しており、マントは水にぬれたようにびしょびしょになっていた。

「くっ……深手ではないが…いったい何が？」

「ふっふっふ…拙僧の事をお忘れですか？」

そこに現れたのは体中に目のような模様を張り付けたアーマーを持つ盲目の6将軍…百目猫拳のテクサルカナであった！！！！

百目猫拳と猫泳拳！！（後書き）

なんかコレ書いてて楽しい

百目猫拳と猫泳拳！！ 2！！！！

「ふっふっふ…拙僧の事をお忘れですか？」

テクサルカナはそう言うと、バンの周りに倒れていた戦闘猫に合図を送り下がらせる。

「テクサルカナ？しかし先ほどの攻撃は…」

「なあに、奥の手を隠すのは拳士として当然の事、バンよ以前に貴殿に預けたのは物見の力のみ。百目猫拳真の力は見せておらんよ…はあっ」

掛け声とともに、テクサルカナはその見えない両目を見開き、俺に向かって突っ込んでくる。

危うく衝突を避けて、上空に飛び上がった俺が奴のアーマーを剥いで無力化しようとしたところ、空中でまたしても謎の衝撃を受け、俺は葦原に再度墜落した。

「クソっ 一体どうなってるんだ？！」

俺の疑問に答えるかのようにテクサルカナは薄く笑うと、そのアーマーに付いた目玉模様は青色に輝いた。

「ご存じのとおり拙僧の百目アーマーは360度すべてを見通す物見の力… エスマイルの跳猫拳で太陽に隠れようとも、拙僧にその位置はすべて筒抜けよ…」

奴の言うとおり、テクサルカナの百目アーマーはどんなところに居る猫であっても100メートル以内であれば瞬く間に見つかってしまう。しかし、奴が俺を見つけた所で奴の攻撃はそのジャガーの体から繰り出す体術でしかないはず…上空の俺を打ち落とすことなどできるはずもない……

「喰らえ跳猫拳!!」

迷った末、俺は再度エスマイルの力を借りることにした。

上空高く跳ね上がり、いつもよりさらに高く高度を取る。ここまで高ければ、奴の攻撃の謎が解けるはずだ!しかし、眼下に佇むテクサルカナはその場から動こうとせず、何かを構える様子もない…いったいどうやって攻撃を…

ズバンッ!!

そうして上空からテクサルカナを観察していた俺はいきなり臀部を何かに貫かれた。

「うわああ!」

上空から錐もみ状態で葦原に墜落する俺。とつさに態勢を整えて着地したものの、ケツからはタラリと血が流れ出す。

「バンよ…さあ拙僧の前に倒れ伏すがよい…」

テクサルカナは俺の墜落に合わせて、こちらに突っ込んできており、その距離はもう1Mほどにまで迫っていた。

慌てて距離を取り、逃げようとするが、避けきれず、跳ね飛ばされる。

「秘密が…奴の秘密が分かれば…」
そう言いながら立ち上がる俺は下半身にふと違和感を感じた…、俺の臀部が水浸しなのである。

「これは…まさか！」
思い立った俺は再び跳猫拳で空高く舞い上がる。

そうして上空に滞空すると今度はテクサルカナとは逆の池の中に目を光らせていると…

水面がきらりと光り、黒い影が見えたかと思うと、こちらに向け、細い水の流れが銃弾のように飛んできた！！！！

「敵は二匹居た！！」

水の銃弾を躲し、池に向け飛び込む！
そこには果たして、6将軍の一人、スナドリ猫のカルティ二が俺を水色のアーマーと共に待ち構えていた！

「気づいたわね！小床木バン！！今回は陸上の戦いだだったが、今回は水中！お前の獅子山拳を破って、猫泳拳の名前を世に知らしめるまたとない好機！大人しくあたしの猫泳拳の踏み台となりなさい！！」

「猫も杓子も獅子山拳の名声に惹かれやがって！獅子山拳だけが優れた憲法ではないんだぞカルティ二！！！！」

とはいえ、水中ではエスマイルの跳猫拳は不利なので、解除してイエネコの姿に戻る。

「姿が見つかったとは言っても、猫泳拳は奇襲の技ではない…その恐ろしさを味わうがいい！」

カルティ―二は俺のそばまで泳いでくると、泳ぐかのように方向転換し、俺の繰り出したラッシュをひらりと水中でかわす。なんだ？この動き…まるで水かきでも持っているようだ！！

「クソっ…息継ぎをせねば」

息切れして慌てて水面に向かうが、途中でこちらに向かってきたカルティ―二の攻撃を弾くために足止めされ、さらに纏わりつかれ、なかなか水面に出れない…

「バン！あたしの潜水記録は5分！それに比べて一般のイエネコはどの程度潜っていられるのかしらね！！」

「しまった！見つけた所で池に飛び込むのではなかった！！」

今更ながらに俺の考えなしの行動を悔やむが、今更後の祭りだ。

カルティ―二を引きはがそうとする俺の打撃は水の抵抗と奴のアーマーで無力化されているし、マリーヌに助けを求めようにもいきなり水に飛び込んだショックでマリーヌは不貞腐れてしまっている！！

本来であれば、隠れているカルティ―二をそのままにしておいて、俺の位置を奴に教えていたテクサルカナのみを相手取ればよかったのだ！それを敵の策略を見抜いたと思い込んだ俺がその興奮で我を忘れて、敵のテリトリーに飛び込むなど…明らかな失策！明らかな軽卒！！

俺は…ここで死ぬのか…

呼吸ができなく、口からガボガボと空気を漏らしながらバンの意識は薄れていく…

『バンよ！お前！ここで死ぬつもりではあるまいな！！』

―誰だ？―

『水中で奴のアーマーを砕くことが出来ぬと言うなら、その力、わが牙豹拳が貸してやろう！！』

その声と共に、俺の体は灰色の光に包まれ、マリーヌが弾んだ声でナレーションする。

―ネオフェリス・チェンジ！mode…ネブローサ！！―

そして光が引くと、俺はサーベルタイガーのような牙と魚鱗甲を持った、雲模様の斑点を持つネコ科に変身していた。

「うわっ眩しい！！」

変身の光で俺を手放してしまったカルティニーから離れ、水面に顔を出した俺は呼吸を整える。そしてそのまま岸に向かって泳ぐが、再びカルティニーに脚を掴まり、水中に引きずりこまれた。

「変身したところで逃がさないわよ！小床木バン！！」

「逃げようとしたわけじゃないさ…逃げ回るお前を捕まえるのが面倒で、わざと逃げるふりをしたのだ!!」

そう叫ぶと、俺は巨大な雲豹の牙を足を掴んでいるカルティーン二の水色のアーマーに突き立て、奴の体に食い込ませる。そしてそのまま首を振りぬき、奴を跳ね飛ばしたところ、カルティーン二はそのまま水中から飛び出して、葦原に着陸した。

ザバンツ

奴を追い、水中から葦原に降り立つ俺。カルティーン二は再び水中に逃げようと、負傷した体を立ち上がらせる。奴を逃がしてなるものか！俺はトウルシギリの姿を解くと、イエネコの姿に戻り、奴に向かって最強の必殺技を放った。

「シューティング・カトウース!!」

流星の如く突っ込む俺の右前足にトウルシギリの大牙が、俺の両後ろ足には加速する為かエスマイルのカギ爪が重なる。

そして俺の右前足はカルティーン二のアーマーを引き裂き、奴の心臓に深く突き刺さったのだ！

「うわあああ!!」

吹き飛び、その場に崩れ落ちるカルティーン二を見て、俺はやりすぎた事に気が付いた。本来奴のアーマーを無力化してその場に倒れさせようとしただけなのに、まさか威力が強すぎて致命傷を与えてしまったとは…ムカージーの時はエスマイルのアーマーが砕けてしまっていたのでシューティング・カトウースの威力が弱まっていたこと

を忘れていたのだ…

「すまない！これは俺の不徳のなすところだ！！」

「何を言っているの…小床木バン…」

「カルティーン？」

「あたしはメス拳士…今まで戦ったどんなオスでもあたしと戦う時は常に本気を出そうとしなかった…私が勝てば『メスだから油断した』だの負ければ『所詮メスだ』などと…言われる日々だった…」

「カルティーン…」

「けれどバン！あなたは違う！！あたしを拳士と認めて全力で戦い、拳士として死なせてくれた！！」

「すまない…カルティーン…俺は前回お前と戦った時、その平凡な能力にお前をメスだと侮っていたのは事実…今回、猫泳拳の真髄を見てしまった俺は、その強さに全力を出さざるを得なかった…カルティーン…お前は他の6将に劣らぬ能力を持っていたぞ！」

「ありがとう…小床木バン…」

息を引き取ったカルティーン二の魂が優しい水色の光と共に俺に宿る。そして、その魂は敵に惑わされて何時も不安定だった俺の心と寄り添うように重なり合って、俺を支える屋台骨となった。

「そう言えば…テクサルカナは逃げたのか？」

周りを見渡すが、百目のアーマーを持つ盲目のジャガーの姿は辺りにはない。

俺は死んだカルティーン二の体を葦原から連れ出し、地面に埋めてやると、そのままツインテールの館に帰ることにした。

その頃、葦原の一角ではしなやかな最速のネコ科が倒れ伏した盲目のジャガーから魂を吸い取っている所だった。

「このムカージーの迷彩、ホントに役にたつわねえ、あの百目アーマーでも見抜けないんだもの」

テレーズは自身の姿を光学迷彩で出し入れしながら楽しそうにほほ笑む。

「これで6将はあたしだけ…ブラックタイガー様のご寵愛はあたしだけの物よ!」

叫ぶテレーズ。

3将の力をもったテレーズにバンは敵うのであろうか…

次回! 3将魔猫に友が泣く!! 乞うご期待!!!

3 将魔猫に友が泣く!!

あの激戦の次の日、俺はあそこにいた子猫たちの事を思い出し、何か手助けができればと、葦原に行く事にした。

葦原では、あれほど居たマタ中の猫達はすっかり消えてしまい、黒虎一味も俺の襲撃でこの場を去ったようだ。一匹の戦闘猫もない。

あの子猫たちに魚の取り方でも教えてあげようと思っていたのだが…俺がカルティ―二を倒した時にはすでに居なくなっていたので帰ったのだが、あの時に家に帰らず、探すべきであった…

そつうなだれて歩く俺の前に、灰色の毛並みのネコが姿を現した。

「久しぶりだな！バン！！」

「お前…吉宗！」

友の姿を見て、駆け寄る俺が吉宗に抱き着くと、吉宗の密集した毛が昔ながらの気持ちいい匂いをさせていた。

「やめろよ、バンwwくすぐったいだろ！」

「良かった…吉宗が生き返ってくれて本当に良かった！！」

俺は泣くように吉宗に縋り付いた。

吉宗はオス同士で抱く今の状況に若干引いていたが、俺の涙を見てされるがままになっていた。

「バン、再会を喜んでくれるのは有難いんだが…」

「すまない、吉宗」

慌てて、離れる俺。

そう言えばいままで吉宗が何をしていたのか聞いてなかったの聞いてみると。

「俺はバンがブラックタイガーを追いつめてこの世界に来た時、気が付いたらあの葦原の中に倒れてたんだ…」

「そうか…やはりこの世界に来た時、みんなの魂が離れて行ったような感じを受けたが、あの時に弾き飛ばされて体が再構築されたんだな。」

「ああ…俺のそばにはエスマイルやトウルシギリも気を失って倒れていた…。しかし俺が目覚めた時、6将の内、テレーズだけが起きていたんだ…」

「テレーズが…」

「俺はテレーズとそのままバンに合流しようとしたんだ…しかしテレーズはあの優しかったテレーズではなく、昔の残虐な性格に戻ってしまったんだ。」

「なんだと！」

「俺は…彼女にバンを助けてくれるように頼んだんだが、テレーズは俺を気絶させるとそのまま去って行った…それ以来俺は彼女を探してさすらっていたんだ…」

「そうだったのか…」

しんみりする、俺と吉宗。テレーズはかつて俺やブラックタイガーと同じく獅子山拳を学んでいた同門で、ブラックタイガーを好いており、奴にことあるごとに付いて行こうとした。獅子山拳の亜流である獅子海拳の吉宗は出稽古に来た際に、彼女に一目ぼれしてアプローチを続けた結果、玉砕を続けたのであるが、6将としての戦いでマクシミリアン先生に殺されかけたテレーズを吉宗が助けた事から2匹の仲は急速に近づきはじめた。しかし俺がブラックタイガーに殺されそうになった時、吉宗は俺の盾となつて、テレーズは吉宗の盾となつて同時にブラックタイガーに殺されたのだ。

それまで、吉宗を嫌つてはいなかったものの、ブラックタイガーを諦める訳でもなかったテレーズ…やはり、吉宗をかばって死んだと言えども、まだ気持ちはブラックタイガーにあるのだろうか…

「そんな事より、バンは此処に何しに来たんだ？」

空気を換えようとしたのか、吉宗が話題を変えた。

「ここに母親からネグレストされた子猫がいたことを思い出してな、魚の取り方を教えてやろうとも思ってきたんだよ」

「ひょつとしたらチビタ達の事か？」

「知っているのか？」

「ああ…昨日ここを通りがかった所、葦原からフラフラと出て来たんでな、俺が保護して母猫の元に連れて行つたよ。まああの分では母親もすぐ元に戻るだろう。」

「そうか…」

それから俺達は長く話し合い、互いにブラックタイガーのアジトを探ることにしてその場を離れたのだった…

次の日、俺が再び吉宗に会うために大通りを南下していた時、わき道を通る見覚えのある毛並みのネコ科の姿を見たような気がした。

気のせいだとは思いつつ、その脇道に入ったのだが、ちょうどネコ科は先の角を曲がるところで、顔を見ることが出来なかった。なんかタイミングが悪いな、と思いつつもネコ科を追ってわき道を進んでいく俺。しかし、まるで俺に尻しか見せたくないとも言っ様に、ネコ科は顔を見せずにまたしても角を曲がる場所であつた。そして俺が追うとまたしてもケツしか見せないネコ科。

こうなれば追いつくまで追ってやるぞ！
そう思いダッシュしたのだが、追いつけない。

そのまま2分ほど追いかけてこした挙句、俺が角を曲がってたどりが着いた先は住宅に囲まれた人気のない空き地で、辺りには鼠一匹さえいなかった。

「ここは・・・？」

訝しがり、辺りをきょろきょろ見渡す俺。

しかし、そこにはネコ科の姿はなく、俺の荒い息のみが静寂を乱している…

「クソっ見失ったか！」

そして、くると元来た道に帰ろうとした俺の目の前、誰もいない道の上で、小石がいきなり跳ねとんだ。

「……………!!!!!!」

慌てて横っ跳びに跳ぶ俺。

すると俺の居た場所の土をえぐる様に『透明な何か』が突き刺さり、地面に穴をあける。

「ムカージーか！」

「…違うわねえ」

トウルシギリを殺した暗殺拳を思い出し叫んだ俺の耳には、かつての知将の声ではなく、友の愛するメスの柔らかな声が聞こえたのだ。

「まさか…テレーズ?!」

『ふふっ』と笑い声を上げながら姿を現したのは、しなやかな体を持つ最速のネコ科。疾走將軍テレーズの姿だ。

「どういうことだ？お前の持つアーマーは獅子山拳の基本である全身鎧の筈…なぜムカージーの光学迷彩を…」

「あらあ、わからないの、バンちゃん？イエネコの頭では理解でき

ないかしらね。それは、あたしがムカージを倒して彼の能力を手に入れたからよ。」

「なんだと？ムカージはお前に力を貸したのか？」

「力を貸す？そんな訳ないじゃない！他猫の力を使うには何も相手が認めなくてもいいのよ！こちらが圧倒的に優れた種族であれば、殺して無理やりにも自分の物にできるの知らないの？」

「なんだと！ではムカージは…」

「あのジジイなら、今頃アジトの地面の下でゆっくりとお休みになつてゐるわ」

「…ムカージは仲間だろう！」

「そんなこと関係ないの、あいつがどんなに優れた能力を持っていたても、所詮は元裏切り者…いつかはまたブラックタイガー様を裏切るでしょう？その前にこちらからね…油断させて後ろからバツサリよ」

「貴様…吉宗は自分を助けようとした貴様を今でも信じて…」

「あの毛だらけのマヌルネコ？ブラックタイガー様の手助けしようとしたら結果的に守るみたいになっちゃったけどね。本当はあいつを狙ったらブラックタイガー様の攻撃に巻き込まれちゃっただけなのよねwwwそれをあたしが救おうとしただなんてバカ猫じゃないかしらwww」

「貴様…仲間を後ろから殺した挙句、純粋な童猫の気持ちを弄ぶとは許せん！」

メスを知らない友を弄んだビッチなネコ科に対する俺の正義の怒りが急速に体を駆け抜けていく。

「変身！獅子拳ジャー！！」

―フェリス・チェンジ！mode…カトウース！！―

俺の叫びと共に、辺りに緑色の光が満ちる。

そして光が引いた後、空き地には全身を白い洗練されたアメシヨ模様の衝撃アーマーに包まれた覆面ヒーロー猫が立っていた。

♪♪♪♪♪

説明しよう！

『小床木バン』は正義の変身ネコヒーロー！

猫野目博士の開発した戦闘A.I『マリーヌ』と共に

人に仇なすブラックタイガーを倒すべく現れた正義の戦士！

バンの正義の怒りが頂点に達した時！

マリーヌはその怒りエネルギーを衝撃アーマーに変えて

バンを覆面ヒーローにするとこができるのだ！！！！

♪♪♪♪♪

「女の心は猫の眼と言う…しかし貴様の心がもう変わらん様にその眼を覚ましてくれる！」

「猫と犬がキスすることがあっても、仲好しの友人になったわけではないって言うじゃない？細かい事気にしてると、モテないわよ！！」

テレーズは俺に吐き捨てるように言うと、その姿をまたしても光学迷彩でかき消す。

俺は奴の歩く音や、砂や草が踏まれるのを逃すまいと【獅子山拳・凧の構え】で奴の動きを待つ。

「バンちゃん、バンちゃん、相変わらずの御馬鹿さん。」

テレーズは俺を怒らせて隙を作ろうとしているのか、位置を変えながら挑発しているようだ。どうやら、警戒してあちらから攻撃する気はないらしい。しかし、いつもなら俺が怒って突っ込んでいるだろくに、なぜか今は気分が非常に落ち着いている。まるで、俺の心に優しい誰かが寄り添ってくれているかのようで…

『バン…あたしの力…使って』

ああ、そうか。

俺に寄り添ってくれていたのは、君だったのか。

―ヴィヴェーリナ・ミスト発動します！―

マリーヌの荘厳な声が響き渡ると共に、俺の頭上に空っぽのカルテイーニのアーマーが現れ、濃い霧を発生させながらゆっくりと消えて行った。

「何？これは霧？ただでさえ見えなくなっているのに霧なんて…ふざけてるのかしら？」

テレーズの言うとおり、霧なんて出てても意味がないと思うのだが…
いや…違うぞ！

霧の中にある木々や草花…地面を歩くアリの事さえ俺には…いやカルティエーニの魂には分かる！そして…俺の右ななめ後ろから近づく優雅な雌チーターの姿も！！

「カルティエーニ…君は本当に強かったんだな…」

俺はメス拳士に尊敬の念を新たにすると共に、アーマーを解き、全身のパワーを集中させる。そして、向きをかえ、霧の中からゆつくりとこちらに近づく光学迷彩を纏った暗殺者に、正義の一撃を繰り出した。

「シューティング・カトウース！！」

流星の如く突っ込む俺の右前足にトゥルシギリの大牙が、俺の両後ろ足には加速する為かエスマイルのカギ爪が重なる。そして、俺の周囲には俺を守るかのような薄い水のバリアが張られる事で空気の抵抗が抑えられ、スピードが減速されることなく目標に迫っていく！！

シュカン！！

そして交差した瞬間、俺の右前足はテレーズの光学迷彩を切り裂き、彼女の肩から脇腹にかけ、鋭い切り傷をつけていた！！

「な…何で？」

「カルティエーニが…カルティエーニが君の姿を覚えてくれたんだ…」

倒れて姿を見せたテレーズに俺は悲しそうに呟いた。

「あの一般兵レベルのスナドリ猫がムカージーのアーマーを破れた
というの!？」

「思えば、君もカルティ二を随分と軽く見ていたな…」

かつて、先生に従っていたテレーズは地球でカルティ二と戦う際、
彼女程度なら俺だけで十分だと言いつつ放っていたことを思い出した。

「だが…彼女の能力は6将にふさわしいだけの力があつたんだ。そ
うでなければあの黒虎も6将には入れなかつただろう…黒虎が好き
な君がそんな事もわからなかつたのか?テレーズ!」

激を飛ばしながら、霧の中をゆつくりと動き、彼女の後ろを取る。

「テレーズ…もう終わりにしよう。気絶させて、吉宗の元に連れて
つてやる…」

そして再びアーマーを着てゆつくりと、テレーズに近づく俺。

テレーズは身を守るためか何やらアーマーを変えているが、俺とは
逆方向を見ているだけでこちらを見えてはいないようだ。

「終わりだ…テレーズ」

俺は彼女の後ろに來ると、彼女の首筋に打撃を叩き込むべく、【獅
子山拳流・渦巻の構え】を取った。

「終わるのは…貴方よバン!」

蹲る様にして、その場に伏せていたテレーズははじけたように前傾
姿勢を取ると、その両後ろ足を跳ね上げるように蹴り出してきた。

「メテオ・ジュバートウス!」

跳ねあがったテレーズの両後ろ足が俺に迫る！右の後ろ足はやや外れて俺の右肩のアーマーを吹き飛ばしたただけだったが、左後ろ足は避けきれず、俺の顎から胸を捕えた！

「がにやつ」

情けない鳴き声を上げて俺は綺麗な放物線を描いて宙を舞い、そのまま地面に落ちる。

「霧に隠れても…このアーマーの前には無意味よ！」

「その百目…テクサルカナまで殺したのか…」

奴だけが使える獅子山拳奥義を受けた俺はゆっくりと立ち上がった。完全には決まらなかったものの、奴の奥義は俺に多大なダメージを残している。しかし、それは意識的に外したとはいえ俺の奥義を半身に食らったテレーズも同じ事。

「あなたを見つけるためだけに取ったんだけど…意外と使えたわ…」
「命を無駄に散らしゃがって…しかし、まだ俺は終わってないぞ…」

そして、二匹の獅子山拳の使い手は、霧の中で重なり合い、辺りには獣の争う声が響き渡ったのだった。

「嗚呼ッ…」

倒れて、アーマーが解除されたテレーズを見下ろして俺はトウルシ
ギリのアーマーを解除した。

「預かった魂の差が…そのまま俺たちの力の差だったな…」

本来、テレーズに力を貸す気のなかった2将と俺に希望を見出し死
んでいった3将。6将の力を2分に分けたとはいえ、魂のモチベ
ションが2匹の命運を分けたのだ。

「おのれ…役立たずのジジイ共がちゃんと力を貸せば…」

「テレーズ…2将の魂を解放して、降伏しろ。」

「誰が！たとえ死ぬとしても、私はブラックタイガー様に従うのよ
！」

俺を憎々しげに見つめるテレーズ。かつて、ブラックタイガーとテ
レーズ、そして俺と一緒に獅子山拳を学んでいた時、姉弟子として
俺に優しく声を掛けてくれた彼女の姿はもう一片も見いだせない…

「どうしても…戻れないのか…」

俺はテレーズの目を見て、彼女の決意を感じ、その愛に殉じさせる
事が弟弟子としての指名だと悟った。

「わかった…テレーズ…姉さん。黒虎に伝える事はあるかい？」

「…ブラックタイガー様の希望が、思いが何よりも『正義』だと…
伝えて…」

「…」

人の世を転覆させ世界を征服しようとしたブラックタイガーのやろうとしたことが正義なのか？そう思う俺だったが、もうテレーズは諦めたように横になっている。これ以上、話しても無駄らしい。

「わかったよ姉さん…シューティング・カトウース!!」

流星の如く突っ込む俺の右前足にトウルシギリの大牙が、俺の両後ろ足には加速する為かエスマイルのカギ爪が重なる。そして、俺の周囲には俺を守るかのような薄い水のバリアが張られる事で空気の抵抗が抑えられ、スピードが減速されることなく目標に迫っていく!!

ドスン!!

そして俺の右前足は柔らかな肉の抵抗を感じつつも、確実に鼓動が鳴る心臓を捕え、俺の目の前には……灰色の毛並みの片目のマヌルネコが……

「吉宗————!!!!!!」

「バン…悪い…テレーズを見つけてつい飛び出ちゃった…」

何でこんなところに吉宗が…

俺の右前足には吉宗の心臓の鼓動がトクントクンと感じる。

その鼓動に合わせるように、俺の前足と吉宗の胸の交差する部分から血が『びゅうびゅう』と吹き出してくる。

俺の視界の隅には、昨日見かけた子猫たちが固唾を飲んでこちらを見ている。そうか…ここはお前たちの家で…吉宗はそれを見に来て…

「吉宗…しぬなよおお!!」

俺は吉宗に刺さった俺の右前足を引き抜くこともできずに泣き叫ぶ。
「なんて…なんて事なの!!」
倒れていたテレーズは自分を守って俺の奥義を受けた吉宗に駆け寄り、その傷口を抑えるかのように俺の右前足と奴の胸を固定するかのよう抑えた。

「やあ…テレーズ…これで君に守られた借りが返せたよ…」

俺の手は肺まで貫通しているのか、吉宗は口から血を流しながらもテレーズに笑みを浮かべる。

「何を…あたしは…あの時あなたを殺そうと…」

「この前…ブラックタイガーの拳の前に出た俺を見て…君は俺に背中を見せなかったね…君が猫を殺す時は奥義を使う為いつも背中を見せるのに…必死な顔を俺に向けて覆いかぶさるようにしてくれた…」

吉宗はテレーズが自分を助けようとしたその姿を思い出したかのようになに涙を流し始めた。

「そのおかげで、俺は即死せずバンに…魂を預けることができた…
そしてバンの中で君と一緒に居る事が出来たんだ…」

「吉宗…」

俺の中にあつた吉宗とテレーズの魂。その2つはくつつくかと思えば、恥ずかしがるように離れるなど、まるで中学生同士のカップルのようだったことを思い出す。

「ああ…バン…俺は幸せ者だ…友の手と好きな雌の手…その2つを胸に当てて死ぬことができる…」

俺の手とテレーズの手。その二つは友の胸の上で同門としての絆を取り戻したかのようにつながっていた。

「なんだ…君らもう仲良くできるんじゃないか…」

そう言つて俺の手の中で吉宗の心臓はその鼓動を弱めていき…吉宗の魂は俺の右前足を通じて俺の中に流れ込んできた。

そして、吉宗の体はその顔に涙を浮かべたまま嬉しそうにほほ笑んでいた。

3 将魔猫に友が泣く!! (後書き)

名前 小床木バン(おとこぎばん)

【基本職】 F・CATUS^{イエネコ} 【サブ職業】 変身ヒーロー

腕力 イエネコ

体力 イエネコ

器用さ イエネコ

敏捷 イエネコ

知力 人並み

精神 師範代

愛情 ネコ程度

魅力 薄めの虎柄・白アメシヨ

生命 馬ぐらい

運 ヒーロー

スキル

【獅子山拳・師範】Lv・18 →

【魂の伝承者】Lv・5 →

(C・caracal)

(N・nebulous)

(F・viverrina)

(F・manual)

【正義の心】Lv・10

【人語】Lv・11

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149y/>

変身する猫ヒーローだけど異世界来た

2011年11月30日11時57分発行